

8 自己治癒するシステム

無痛化装置の解体について考えてきた。しかしながら、以上に述べたことは、まだほんの入り口にしかすぎない。なぜなら、われわれはまだ無痛文明の核心部分に触れていないからである。

もし、以上に述べたようなやり方を駆使することで、ほんとうに無痛化装置の解体が進むのだったら、わざわざ無痛文明論を書く必要もなかったのである。前節で述べた個々の点は、すでに先人たちによって何度も指摘され、実践されたことばかりだからである。

もちろん、それらの実践は必要不可欠だ。そのような地道な解体作業を積み重ねるところからしか、道は開けない。しかしながら、そこにとどまっていたのでは、無痛文明の仕掛けてくる罠に陥るだけである。

なぜなら、無痛文明は、これらの解体作業によってダメージを受けながらも、ただちに自己治癒をはじめからである。無痛文明は、「自己治癒するシステム」である。われわれは、このメカニズムを解明しなければならぬ。

無痛文明は、無痛文明と戦おうとする者の力を利用して繰り返し繰り返し立ち直っていくようなシステムである。無痛文明と戦

おうとする者の力を利用して「自己治癒」するシステムである。いくら「無痛化装置」を傷つけ、弱体化させようとしても、それを傷つけ弱体化させようとする者の力によってみずからの傷を癒やし、みずからを活性化させてしまう仕組みを、無痛文明は内在させている。無痛文明を解体しようとする力を利用して、解体された無痛化装置を再建し、さらに強大な装置へと作り替えることすら試みるシステム、それが無痛文明だ。

ここに至って、われわれは、無痛文明論の根本問題に直面する。それは、自己治癒する無痛文明と、いかにして戦えばいいのかという問題である。戦えば戦うほど強くなる敵に対して、どのような戦いを挑めばいいのか。つかまえようとする力を利用して逃げてゆく相手を、どうすればつかまえることができるのか。自己治癒するシステムの内部に、戦う私が組み込まれているときに、私はいかにそのシステムと戦えばいいのか。戦おうとする私の力を利用して、私を包むシステムがみずからの傷を癒やし、立ち直つていくときに、私はいかにすればそのシステムを倒すことができるのか。戦う私が、自分では気づかないところで相手の自己治癒をサポートしているとき、私は何をしていることになるのか。

（書籍版に続く・・・）